

価値組

「勝ち組」「負け組」という言葉が広まって久しい。嫌な評価である。たとえ、今「勝ち組」であったとしても、将来もそうであるとは限らない。永遠に勝ち続けるためには、戦いつづけなくてはならない。修羅である。

豊かさや安心は勝負の中には無い。昭和の初め久米正雄は「この世のことは、金があれば半分はかたが付く」と言った。仮にその言葉を確認にしても、半分はかたが付かないのである。

「価値」に重点を置く「価値組」でありたいと思う。

第9号

2003年（平成15年）
12月1日月曜日（毎月1日発行）
1部50円（送料別）
発行所／天台宗出版室
〒520-0113 大津市坂本4-6-2
天台宗務庁内
電話 077-579-0022（代）
Eメール／T-Press@tendai.or.jp

天台ジャーナル

The Tendai Journal

信仰が種子である 苦行が雨である

◎一隅を照らす運動

天台宗全国一斉托鉢始まる



心の田を耕す

今年も、寒風の中を天台宗の全国一斉托鉢が始まった。托鉢は「行乞（ぎょうこ）」ともいわれる。

インドでは出家した男性を比丘、女性を比丘尼というが、その意味は「乞（こ）う人」で布施によって生活する人のことである。

釈尊が、マガダ国で、田を耕していたバラモンに食を乞われると「人に頼らずに、自分で田を耕して食え」と罵倒

された。その時に釈尊は「我もまた田を耕すものなり」と言われたのである。それは、心の田を耕すという意味であった。

「信仰が種子である。苦行が雨である。智慧が農具である。恥ずかしいと思う気持ちがある。恥ずかしいと思ふ気持ちが鋤棒である。そして人々の心を耕し、あらゆる苦悩からの解放という実をみおらせるのだ」。

この中で釈尊は、また「体

をつつしみ、言葉をつつしみ、過食をしない」とも言われ、托鉢とは単に食を得る行為ではなく「少欲知足」を実践し、人々に布施をせざる尊い行為であると語られた。今も、仏教国のタイやラオスでは、喜捨する人々の方がへりくだっている光景が見られる。

今、天台宗が展開している全国一斉托鉢は、国内外の弱者救済のために行うものだ。僧が自らの食を乞うという形からは少し離れる。しかし、釈尊が説かれた心の田を耕すという意味では、なんら変わ

りがない。

それは、あなたの心にある仏心を耕すことであり、また私の仏心を耕すことである。執着を捨て、他者の幸せを祈るみ仏のところに添うよう努めてゆきたい。

毎年、決まった場所で待っていてくれる方がいる。恥ずかしそうにして募金箱にいれ

てくれた少女がいる。お米を下さる方がいる。多額の浄財を下さった老夫婦もいる。

その暖かいところに、私たちのところを添えて、待っている人々に届けたい。

人々のために托鉢をすることによって、我もまた田を耕すものでありたいと思う。

素晴らしき言葉たち

Wonderful Words

その人たちに生命をあたえたものは風
いま私たちの口から出てくるものも風
風がくれた生命
その風が止むとき、私たちのも死ぬ
いまでも指の皮の中に風の吹く道が見える
わたしたちの祖先がつくられたとき
風がどこかで吹いていたかをそれは教えている

「アメリカ先住民
ナボバ族の癒しの詩」

メキシコ・アメリカに長期滞在し、現在日本で、「エンパワメントセンター」を主催する森田ゆりさんの著書『エンパワメントと人権』のこの力のみなもとへ』の中に出てくるこの詩。

インディアンの子どもたちは思春期になると、砂漠や山の中へ出かけ、たった一人で時を過ごす。三日後彼らは自分の内にある大切なものを発見して帰ってくる。人は女だろと男だろと、障害があるらと、少数民族だろとみなそれぞれ個性の輝きを必ずもっている。

そして、自分の内的な強さ、輝き、すばらしさは自分だけ

ではなかなか気づけないものだ。彼らは、大自然と向き合うことで輝きをしっかりと発見する。自然は人間と違って偏見や期待過剰、えこひいきやいじめなどを一切しない。だから人の内に鼓動するいのちの力を教えてくれるのだ。

一本の草、一羽の鳥、一匹の狼、すべての人間の魂。すべての生きとし生けるものの魂が聖なる存在なのだ。「聖なる魂」それはインディアン

の生命思想を見事に凝縮した深い意味を持つ。

詩のラストは、指の皮の中に見える道が、祖先に続き、大いなるものに続いていることを示すのである。

報いる



天台宗四国教区の取り組み

別当大師光定法師の生誕地は伊予の国(四国)風早郡としか分かっていない。

伝教大師最澄に師事すると共に、その勧めもあって空海からも真言密教を学んでいる。当時の日本を代表する二大宗教者から直接指導を受けた僧侶である。

大乗戒壇公認後に行われた授戒会では、嵯峨天皇が光定のために証明書(戒諱・国宝)を渡していることでも、嵯峨天皇の信頼も非常に篤かったことがわかる。

しかし「いわば、比叡山千二百年の礎を築いたと言っ

ても過言ではないのに、伝教大師や慈覚大師に比べて世間の認知度は著しく低い」と語るのは、「別当大師光定を考える会世話人」で、今回の木像制作の世話人を務める醫座寺の熊沢芳裕住職である。

「光定は、祖師に寄り添うように忘己利他の精神で生きられた方である。墓所も浄土院の横にひっそりとある。しかし、千二百年が経過し、その偉大なお徳を顕彰するのは私たちの責務と考えて、四国教区の総意をもってこの事業を行うことにした」と語る。二〇〇八年は、別当大師が

祖師に邂逅して千二百年であり、同時に一一五〇年遠忌になる。「このことは、輝きの陰に苦勞多い人への励みとなり、大法会のはなむけになると確信している」。

木像の制作は、松山市に在住の仏師石田富治・元治親子が行う。材質は楠で、台座を除いて二尺五寸の座像、ほぼ等身大に近いという。厨子付きである。延暦寺別当大師堂の絵像が参考にされているが石田富治仏師は「穏和な表情の中にも、内面の厳しさをみださなくてはならない」と鑑真和上像をはじめ各地の高僧像

を見て回った。また衣などの時代考証も欠かせない。レプリカを作成し、教区と打ち合わせを兼ねて光定大師の業績を聞き、試行錯誤を繰り返しながら制作が進められている。

完成予定は来年師走。大法会期間中は延暦寺の大講堂に奉安され、全国からの参拝団に光定の貢献を再認識してもらうことになる。

そして、大法会終了後は、比叡山麓・坂本にある別当大師堂の本尊として祭祀されることになっている。



制作中の座像を囲んで。左から熊沢芳裕師(醫座寺住職)、高橋博道師(正観寺住職)、安岡光覺師(佛性寺住職)

最新刊
天台ウーマン
という生き方
 おんなたちのスロー・ライフ
 横山和入 定価 一三〇〇円十税
 宗門人必読の書
 「天台に生きる女性たち」十三人のオンリーワンの輝きをさらりと描き出して話題を呼んだ「比叡山時報」の好評連載が本になった。新しい天台時代の幕開けを予感させる一冊。
好評既刊
葬式仏教は死なない
 青年僧が描くニューブッディズム
 ひろさきや 井上治代 高橋卓志 藤田庄司 全日本仏教青年会
 定価 一八〇〇円十税
 二〇〇三年京都で開かれた葬式仏教をめぐるシンポジウムで、ひろさきや氏らが繰り広げたトーク・バトルを再現し、青年僧の新たな活動を伝える。シンポに際して初めて行われた青年僧へのアンケート調査の分析を初公表。貴重な資料として注目されている。
 図書出版 白馬社
 〒612-8105
 京都市伏見区東奉行町一三
 F A X 075(6013)6755
 電話 075(6013)6755

いまこそ別当大師に"光"を

四国教区で、別当大師光定像の制作が進んでいる。光定は伝教大師の最も信頼した弟子である。大師が晩年に病床にあった時は、嵯峨天皇に拝謁し大乗戒壇建立の勅許を願い、また伝教大師入滅後は、比叡山の諸堂建立や後継者問題などの難問を解決するなど終生、延暦寺の実務の責任者(別当)として力を尽した。しかし、今日では歴史の中に埋もれた感否めない。生誕地の四国教区では、天台宗開宗千二百年大法会にあたり、報恩と供養のために発願したとしている。



別当大師像制作にあたって精密に組まれたレプリカ(ミニチュア像)



仏師・石田元治氏



仏師・石田嵩治氏

創生期の天台宗を支えた 別当大師「光定」

「別当大師」と尊崇される光定は、宝亀十(西暦七七九)年に、伊予国風早郡に生れた。幼くして両親を亡くし、横峰寺等に籠もって修行をしていた二十代後半の頃、比叡山に最澄を訪ね教えを請うようになる。当時、最澄は唐から帰り天台宗を開宗したばかりであった。最澄のもとで学びながら、空海から真言の教えも学ぶ。光定は、最澄が亡くなる三カ月前に、嵯峨天皇に拝謁し、大乗戒壇の勅許を願うが、許可されず、

最澄は比叡山の後事を光定に託して遷化する。大乗戒壇勅許の知らせは、最澄遷化の七日目であった。齊衡元(八五四)年に朝廷から円仁(慈覚大師)に延暦寺第三代座主の任命があり、光定は延暦寺別当(寺院の経営総責任者)に任ぜられた。

実際に、円仁の入唐や諸堂の建立など、座主不在の十八年間、比叡山を支え続けたのは光定であった。「別当大師」と尊崇されるゆえんである。



ハワイ開教奮戦記(4) 物件を探して…

荒了寛 (カットも筆者)

比叡山大学問題などで、宗
教上の東西対立の時期にあつ
て、「ハワイ開教」を宗内一
致して取り組む事業とするに

は、まだ無理もあつたよう
すが、神原玄祐宗務総長の英
断によって、公式に「天台宗
ハワイ別院創建視察団」が派

遣されました。メンバーは総
本山の水尾眞寂師、生田孝憲
師、小林隆彰師、群馬・大藏
院の静谷行謙師、東京・嶺照
院の羽場慈温師、それに荒了
寛の計六名でした。

この顔ぶれからうかがわれ
るように、この視察団が時の
内局によって公式に派遣され
たことは、その後のハワイ開
教事業の性格を決定する上で
極めて重要な意義をもつこと
になりました。

一行は、出発当日上野寛永
寺に集合、杉谷義周門主、今
東光貫首からの激励の言葉を
いただき、羽田からホノルル
へと向かいました。ホノルル
へ着くと、早速その日から日

系の事業家末村氏の案内で各
宗別院を訪問、今貫首から紹
介された日系の事業家たちに
も挨拶、ハワイの日系社会や
仏教事情について聴取して回
りました。



今年11月、開教30周年記念法要で
挨拶する荒了寛師(ハワイ別院で)

鬼手仏心

生きることは 天台宗務総長 西郊 良光

釈尊は、この世の苦しみを
「娑婆苦」と言われた。
娑婆とは、私たちが生きて
いる世界である。インドのサ
ンスクリット語「サハ」が
中国を経た時に、この漢字が
あてられたのである。

サハとはもともと「堪え
忍ぶ」という意味である。す
なわち、この世に生きるとい
うことは堪え忍ぶことなので
ある。
伝教大師も、比叡山に入山
するにあたり、その決意を「願
文」で次のように述べられて
いる。
「悠々たる三界は純(もつ
ぱら)苦にして安きこと無く
……」。

悠々たるように見えるこの
世の中は苦しみばかりであつ
て、安らかな楽しみという
ものは無い、ということであ
る。
こう言われてみると「人生
とは楽しむもの」という風潮
に慣らされた現代人には違和
感があるかも知れない。しか
し、楽しみは一瞬で、この世
に生きるといふことは、苦し
いことが多いといふことは、
ある程度、人生を生きた人な
らわかることである。生、老、
病、死という「四苦」は避け
られない。

人が一人だけで生きていけ
ないものである。けれども他
者と関係を持てば、持ったで
その関係の中で苦しむのであ
る。それは、人の心に渦巻い
ている煩惱や欲望による。我
執といつてもよい。そのこと
を、はっきり見据えることが
肝心だと説かれていたのだ。
釈尊や伝教大師は、己を徹
底的に見つめた方であつた。
のである。

一行の最大の関心事は「別
院をどこに開くか。とりあえ
ず普通の住宅でも買収して
スタートしよう」という構想
でしたが、立地条件や土地、
建物の価格はどの程度のもの
か、見ただけでもつけて、報
告書を作成したいということ

で、末村氏が推薦する物件を
見て回りました。
羽場師としては、当時の金
で三千万円位なら何とか集め
られるだろうという腹づもり
のようでしたが、その程度の
建物では寺として使用できる
ような建物は見つからず、ま
た、住宅地や商業地の建物を
宗教施設として使うことは、
法律上難しいということもわ
かり、物件探しは時間をかけ
て取り組んでいくということ
になりました。

サンダルにアロハシャツ

視察団一行は初日に、当時
二社あつた日本語新聞社にも
表敬訪問をしていたので、天
台宗の視察団がハワイにきて
いると記事が新聞にのりまし
た。その新聞を読んだという
人から「私は戦前、天台宗の
不動院の役員をしていた者で
す。是非お会いしたいので
帰国の日に空港に見送りに参
ります」という電
話が入りました。

「そういう方なら
いますぐにでもお
訪ねしたい」と羽
場師がいうと「都
合がつかないので
空港で会いませう」という返事
でした。ともかく、
こういう人がいれ
ば別院の開設や運
営に大いに力にな
って頂けるだろう
し、寄付もしてく
れるだろうと、一
行は急に元気にな
りました。

帰国当日、空港で「その人」
が現れるのを一行は首を長く
して待っていました。搭乗
時間がきてもそれらしい人は
現れず、あきらめてゲートに
入ろうとした時に「その人」
は現れました。古い麦わら帽
子にサンダル、アロハシャツ
にだぶだぶのズボンという姿

でした。「元役員」というこ
とで、期待していた姿とはあ
まりにも違っていたので、一
行のそれまでの元気は失せて
しまったのです。それは、こ
れからの天台のハワイ開教の
厳しさをうかがわせるに充分
な、まことに象徴的なシーン
でした。ともかく「今後とも
何卒よろしく」という挨拶で

「そういう方なら
いますぐにでもお
訪ねしたい」と羽
場師がいうと「都
合がつかないので
空港で会いませう」という返事
でした。ともかく、
こういう人がいれ
ば別院の開設や運
営に大いに力にな
って頂けるだろう
し、寄付もしてく
れるだろうと、一
行は急に元気にな
りました。



お便りを下さい

あなたの周りでの出来事、ご感想をお送り下さい。
また、取材について「こんな出来事、あんな人々」を
お知らせ下さい。
封書、FAX、Eメールで、天台宗出版室まで。
連絡先は、題字横です。

FAXは、077-578-4814

ひとりの力は知れている

ホームページアクセスが年間30000件

新宗務所長会長 神原玄應師

宗務所長の改選によって、この度宗務所長に就任した。全国三十二教区に分かれた天台宗地方行政のまとめ役である。国でいえば、知事会の会長ということになる。もっとも、各寺院との連絡とおつきあいは密接濃厚だから、なかなか気苦労の絶えない役職である。従来、教区（地方）中心であるから、教区同士の横の連絡はあまり必要なかった。それが時代の流れと共にブロック単位となり、全体での情報交換をしながら各団体とも親睦と交流をはかり「所長会としての意向」を打ち出すようになってきた。責任は重い。



参拝の人々を迎える神原師

師匠ゆずりのパワー

頭が痛いのは、どの教区でも増え続けている「寺と寺のトラブル」である。問題はまず宗務所長に持ち込まれる。立場上、どちらの肩を持つわけにもいかない。最近「住職や財産をめぐる対立も多い」という。「お寺を自分のものだと思っから間違っている。仏様から預かっているという自覚がない」と嘆く。しかし、貧しい寺は、住職が兼職して、給料を寺につき込んで維持しているところもあり、親族で役員を占めるところが多い。悩ましい問題である。

「弟子を養成するほかに手だてはない」。自坊は佐賀県基山の大興善寺。つつじの寺として有名な寺として有名だ。つつじは、檀家の少ない寺をなんとかと、師僧で天台宗宗務総長、三千院門跡門主を務めた故神原玄祐大僧正が開発した。

自身の代となつてからは、紅葉にも力を入れる。「最近紅葉も大分浸透してきました。参拝は二対一ぐらい」。同寺のホームページには、多い時には一日二百件、一年では三万件近い問い合わせアクセスがあるという。また、毎月法話も更新し、世相に警鐘を鳴らしている。

少ない檀家に迷惑をかけるまいと、参道補修は自力でおこなった。ところが「末代まで残るものを、どうして檀家に相談しないのかと詰め寄られましたね」。結局、協力をもたうことになったと笑う。

「自分一人の力なんて、たいたことない。人の力を頂くか、応援してくれるように持つてゆくのがいいんです。お寺は周りの人の力で持つ」が持論である。

天台宗が全国展開している檀信徒総授戒も来年秋には、太宰府の観世音寺で開催するところまでこぎつけつつあるし、今まで眠っていた教区の教学布教研究所をこ入れし



春のつつじと並んで有名な大興善寺の紅葉

て、声明、パソコン、教学セミナーなどが活動できるようにした。「教区には、優れた人材がいる。その存在を認めることで、教区は活気づく」と語る。写経も「葬式や、速夜お参りの度に、無くなった人の供養に、仏様のために」と勧めて回った。精神的なアイデアマンでもある。師僧ゆずりのバイタリティーかとも思うが「師僧は、思いついたら即というなかなかにせわしい人でした。自分は、反面教師にしているのですが、やはり親の子かなと思います」。これまでの所長時代、先の稲岡慈順所長会長（現天台宗法人部長と一緒になって、当局を支援もし、時に意見もしてきた。その稲岡部長は、神原会長への期待を次のように言う。「彼は、問題点をつかむのがうまいんだよね。言いたいことも、ズバリと言ったが、ねじれていないんだな。あれは、持つて生れたものだね。今のままでいいよ。小細工しない方がいいと思うな」。

消防用設備（工事及び保守点検）設計、施工

株式会社 **しばでん**

〒601-8005 京都市南区東九条西岩本町39

電話 075-661-1117

FAX 075-681-4655

休日・夜間 075-931-5516

総本山延暦寺御用達

遠藤新兵衛商店

〒600-8334

京都市下京区油小路通六条南入

電話 (075) 351-1367

FAX (075) 351-1476

